

今年度第5回目となる外国語活動・外国語科の研究授業を行いました。協議会では、クイズを使った中学年の外国語活動の指導方法について協議を行いました。指導・講評では、玉川大学教授 工藤 洋路先生よりご指導いただき、研究を深めました。

研究主題

関わり合い、学びを広げ、深める児童の育成

～ 思いを豊かに表現できる授業づくりを通して～

授業者:3年1組 担任

単元名:「Unit8 What's this?」

指導講評:玉川大学教授 工藤 洋路先生より



研究主題をもとに、以下4つの視点を中心に授業を行った。

① 個別最適な学び、協働的な学びの一体的充実

本単元では、児童が個人の課題を解決する『マイタイム』を設定した。『マイタイム』では、やり取りの間に、個々で出た疑問を児童自身が調べたり相談したりして解決する活動である。課題解決によって、やり取りの際に自信をもって表現することができる児童の増加が期待できる。本時では、タブレットを用いて、分からなかった英語の表現を調べたり、友達や教師と相談して表現や単語を確認したりする解決方法を中心に児童が考えて進めていくようにした。『マイタイム』で解決した課題をやり取りで実践することによって新たに浮かび上がった課題を解決するというサイクルを通して、個別最適な学び、協働的な学びの一体的充実の実現を目指す。

② 表現を繰り返し使うための工夫

クイズを出したり、教師のやり取りを見せたりする中で、自然に新出表現と出会えるようにした。教師の後に続いて同じことを繰り返し言うのではなく、教師と児童、児童同士で何度もやり取りする中で、自然と何回も繰り返し言うことができるような授業展開にした。また、分からなかったことを学級全体で共有・解決し、児童が自信をもって自分の思いや考えを伝え合えるようにすることで言語活動の充実を図った。

③ 効果的な中間指導

中間指導のねらいを明確にすることで、児童に身に付けさせたい力を意識し、児童がめあてを達成できるように意図的に授業を展開した。何のために中間指導をするのか、その中間指導で何を期待するのかということをはっきりと教師側がもち、深まりや広がり意識的に指導した。

④ 目的や場面、状況等を明確にした言語活動の工夫

本単元では、自分の好きなものを楽しんで友達と伝え合うという目標を設定し、そのために、学年全体で好きなものクイズ大会をするという最終活動を提示した。友達と好きなものを伝え合うという目標を設定することで、「自分のことをもっと知ってもらったり、友達のことをもっと知ったりしてより仲良くなりたい」と、児童の意欲を向上させた。また、クイズ大会をするという最終活動を提示したことで、「友だちが楽しんでクイズに挑戦できるようにクイズカードを作成したり、ヒントの出し方を工夫したりしよう」と見通しをもって活動に取り組めるようにした。

〈授業者自評〉

子どもたちは元気に楽しく取り組んでいた。クイズをやりたいという気持ちが強くなってしまっていたため日本語でのやりとりが多くなってしまった。やりとりの大事な表現がぬけているときがあり、中間指導での返し方がうまくいかず、ぴったりはまる表現をだしてあげることができなかった。

〈研究協議会〉

コミュニケーションを行う目的や場面、状況等について

- ・クイズを出し合うということを楽しみ、元気に活発に一生懸命取り組んでいた。
- ・英語で伝えるということをもっと意識させ、日本語での活動にならないようにより簡単な言葉やジェスチャーで価値づけていき、その楽しさを感じてもらえたらよい。

個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実について

- ・たくさんのペアでクイズを出し合うことで、マイタイムで調べたことや、中間指導で確認したことを次の活動で生かしていた。
- ・タブレットで調べて学ぶ児童と、周りの先生に聞いて学ぶ児童がいて、自分に合った方法で課題解決をしていた。

クイズについて

- ・ヒントを出す際に、答えに直接つながってしまうときがあり、ヒントの出し方が難しい問題があった。
- ・What's this?と聞いていたが、その表現には指すものが必要であるため、シルエットを入れるなどしてもよかった。その際にはシルエットクイズになってしまわないように英語で伝えるということを意識させ、時間設定を短めに設定する必要がある。

中間指導について

- ・最初の中間指導だけでも、good hint (big or small?、味、色、長さ、大きさ、形)にふれてもよかった。
- ・質問に対してすべて答えを言わず、マイタイムのときに自分で調べる余白を残していたのが良かった。
- ・クイズの幅が広がったため、中間指導でわからない言葉について質問があってもその表現をその後使わない児童が多くなっていった。「何のクイズをしている時に言いたかった言葉なのか」を全体に共有すれば、質問があった表現を活用できる児童が出てきたのではないかな。

〈指導・講評：玉川大学教授 工藤 洋路 先生〉

コミュニケーションを行う目的や場面、状況等について

- ・クイズを楽しもうと積極的に活動に取り組んでいた。
- ・児童がクイズの答えにする物が多様であったため、自由度が高い活動になり、使う表現も幅広くなっていた。幅を広げるなら必要な表現を練習したり、個別の手当てをししたりするのも必要だったのではないかな。

個別最適な学びについて

- ・個別化と個別最適な学びは別であり、一斉授業でも考えていることが児童ごとに異なっていて、それが各児童の学びの促進になっているのであれば、それは個別最適な学びと言える。
- ・1人1台端末での学習は個人に委ねられることが多いため、そのままでは個別最適な学びにならない。

中間指導について

- ・マイタイムでタブレットを使って単語を調べる場合、児童が耳にしたことがない単語の場合は発音が分からず、適切に使うことができない。機械翻訳を使わせるなら使い方をきちんと指導する必要がある。

やり取りについて

- ・モデルを見せる回数を増やし、良いやりとりをたくさん見せることで頭の中にやりとりを思い描かせることも大切である。
- ・クイズを出す人、答える人、どちらに視点をあててモデルを見せているのか示し、やりとりにおける役割を明確にしたデモンストレーションを見せることも効果的である。

今後について

- ・次の時間に、別のクラスと合同で学年全体で同じ活動を行うときには、クラスで行うのと学年で行うのは何が違うのか、自己紹介から行うのかどうか導入を考える必要がある。